

「賢明にふるまい」コロサイ 4：5，6

I 「外部の人に対して賢明にふるまい（原語：歩む、生活する、振舞う）、機会を十分に生かして用いなさい」：5。

1. 「外部の人」は、ただの人々ではない。神が造り、命を与え、その人々の罪のためにも主が十字架で死なれたほど、神に愛されている人々。神は、その人々の救いを望んでおられる。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」（1テモ2：4）。それゆえ、私たちキリスト者は、主の救いを伝え、証しする証人として、教会の外側にいる人々に、主からいただく愛と識別力、聖なる知恵をもって賢明に振舞う必要がある。その理由→

- ① 私たちの思慮を欠いた言動（聖人ぶって優越感をふりまいたり、口やかましく意見、主張を押し付けたりすること）によって、未信者をつまづかせ、心を離れさせ、福音をそれまでよりももっと嫌うようにならないため。
- ② 不正や不品行な汚れた振る舞いで、キリストの聖なる御名を傷つけ、教会が人々の中傷を浴びて、聖書の言う意味の迫害ではなく、不必要な反対（主のための反対ではなく、自分たちが蒔いた悪のために受ける反感）を受けないため。
- ③ 「朱に交われれば赤くなる」と言われるが、未信者と交際する間に、彼らの不正、ごまかし、不品行により汚され、世俗的にならないため。この世と調子を合わせ「話のわかるクリスチャンだ」と表面はほめられているようで、いつかは「それでもクリスチャンか」と言われるようにもなる。「塩（腐敗を防ぐ、清める）が塩けなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです」（マタ5：13）。主は最高の模範であり、その主が今も私たちの社会生活の真っ只中でインマヌエルの主として共におられることを覚えたい。主は、神であるのに人となられ、世の人々の所に降りて共に生活された。しかし、世の人々と罪を共に犯すことはされなかった。と同時になすべきことをし、人々に愛を示された。私たちも、この主がいつも共におられることを覚え、世の人々と共に罪を犯すことなく人々を主からいただく愛で愛し、任された仕事、責任を果たし賢明な（お人好しでだまされるのではなく、神からの知恵をいただきつつ）振舞をし主を証しできるように祈り合いたい。

2. 「機会を十分に生かして用いなさい」。神に祈りつつ、待つ時と行動に出る機会を伺い、判断し、その好機を真に価値あるものとする。また、神から与えられている時間を十分に生かして用いる。これは、時間があれば、なんでもかんでもやるということではない。それでは、焦点が定まっていない生活、疲れ果ててしまう人生となり神の喜ばれる実を結ぶことはできない。大切なこと

- ① 一日を始める時、まず神と交わり、聖霊に満たされ、神が与えてくださる機会を逃さずつかめるように祈る。「愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい」（エペ5：16）。
- ② 機会を十分に生かして用いるためには、たくさんやるべきと思われることの中で、正しい優先順位を識別できるように祈ることである（ヤコブ1：5）。あれもこれもでは、心が分かれ、集中できず、疲れ、良いものは生み出せない。祈り：「主よ。今日という大切な日、何を優先してやるべきでしょうか」。やるべき時、休むべき時（マルコ6：31）、主を伝えるチャンス等を識別できますように。

③ 優先順位を祈り求める時、大切なことは、自分が本音の部分で何に価値を置いているかを知ることができるように祈ることである。「何が良いことで、神に受け入れられるかをわきまえ知るために、心（思い）の一新によって自分を変えなさい（変えられ続けなさい）」（ローマ 12 : 2）

II 「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります」： 6。

私たちのことばが、いつも親切で、塩味の聞いたものである秘訣は、いつも親切（原語：好意、愛顧、寵愛、恩恵、感謝）で、塩味の聞いたキリストのことばを聴き、心に内に豊かに住まわせ続けることである。その時、私たちの心から親切で塩味の聞いたことば（愚かなおしゃべり、中身の無い味気ない言葉ではなく、キリストに味付けされた味のある言葉）が出てくる。真に親切な愛の言葉は、表面のつくろいではなく、相手の人格（意見は違っても）を主からの愛で心から愛している時出て来る。外部の人々も、私達も、ことばを交わす中で、自分のことを考えてくれているか、責めているか、助けようとしているのか、敵対しているのか、察知する。責められていると感じれば、防衛的になり心を閉ざし、友好的だと感じれば、心を開いて応じ、また主のことに耳を傾ける。怒りのこもった声、攻撃的な姿勢、見下すような態度、皮肉っぽい表現、相手に恥を感じさせるような言葉、冷たい言葉は、親切な塩味のきいたものではない。主が下さる親切な心、愛は、相手の人格を認め愛する（意見が違っても）。一緒に仕事、奉仕をしていることへの感謝、喜びを示す。その上で、必要なことを愛をもって伝える。相手の性格を決めつける様な言い方は避け、何を求めているのか具体的に誠意をもって話す。「そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります」。「ひとりひとりに」→同じ人はいない。同じ人でも、状況は変わる。だから、答え方は一つではない。ワンパターンではない。主は、一人一人を愛し、理解し、その人に応じて接し、答えられた。それ故に、私たちは、祈りと備えが必要。御聖霊の助けが必要。マタ 10 : 19, 20。答える前に、良く聴くことをしなければ、的外れの答え方になってしまう。ヤコ 1 : 19。答えが欲しいのではなく、聞いてもらいたい人には、正しく耳を傾けることができますように。福音、主のことを真剣に尋ねる人には、聖霊に頼りつつ、心から福音を語れるように「イエスは…彼らの聞く力に応じて、みことばを話された」マルコ 4 : 33 「必要なとき、人の徳を養うのに役に立つことばを話し」エペ 4 : 29